

2019年12月

氷積の章

尾池和夫選

とりどりの雲競ひ合ふ野分あと
木の実落つただそれだけの日なりけり
青空にもつとも近き盆の家
灯の透きて秋の簾となりにけり
乗換へて山近くなる吾亦紅

霞袂集

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

氷凌集

石組に氣勢競ひて秋の庭
ふるさとの銀座通や秋の風
本棚の一冊逆さ秋灯
秋澄めり頂上へ打つ尾根の鐘
掌に余る形見の硯洗ひけり

原 稔
重富 國宏
大口 彰子
佐藤美智子
吉田 恭子

2019年11月

氷積の章

尾池和夫選

家中の灯点して終戦日
空海も見たる不知火かと思ふ
病室に待つ名月となりにけり
墓じまひしたる更地や晩夏光
大の字の瘦せて月出る如意ヶ岳

霞袂集

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

氷凌集

蛸壺は綱解かれて夏終る
末つ子のいつも真ん中秋の空
馬塞に沿ふ馬の並足爽やかに
晩夏光湖底に昔日の暮し
秋めくや支へ木増ゆる寺の松

余米 重則
大口 彰子
高橋千画子
佐藤美智子
原 稔

2019年10月

氷積の章

尾池和夫選

武蔵野の山々つなぎ雲の峰

霞袂集

友永美代子

浮いてこい吾等人間探求派
雨団扇おくれがちなる夏芝居
萍を騒がせ鯉の産卵期
夏見舞ひと文字替へて乱れけり

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

氷凌集

そこのけと電気くらげの横泳ぎ
天地指す像の手のひら原爆忌
境内をとばしる清水時太鼓
白山の見えぬを指して梅雨深し
緑蔭や尻逞しき馬車の馬

余米 重則
原 稔
岡橋 啓二
佐藤美智子
高橋千画子

2019年9月

氷積の章

尾池和夫選

絶ゆるなきわだつみの声沖縄忌
殺生のあとの閑けさ蟻地獄
海霧を来る三陸鉄道昼灯し
南風や十大弟子の強面
水無月の学舎に近き喫茶店

霞袂集

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

氷凌集

メビウスの帯に乗せたき蟻の列
あぢさゐや鞆持たせて駆け行く子
神宮の旬日早き茅の輪かな
伊集の花散つて気根に戻しけり
時の日や電波時計のあいそなし

余米 重則
大口 彰子
重富 國宏
屋嘉比順子
原 稔

2019年8月

氷積の章

尾池和夫選

夏めくやさくさくと切る生野菜
更衣いつもの吾がゐて遺憾
いづれまた火の山となる新樹かな
若竹のまだ風呼ばぬ青さかな
銅像の蒼き涙や椎若葉

霞袂集

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

太刀舞を継ぎ若者の祭足袋
逆立ちの震へ小刻み若葉風
農道に水の溢るる田植時
船頭の筑後なまりや遊び舟
記念樹の屋根に届くや子供の日
雲版の一打に夏の立ちにけり

氷凌集
余米 重則
大口 彰子
佐藤美智子
重富 國宏
原 稔
松本 節子

2019年7月

氷積の章

尾池和夫選

岩礁に釣人残し春の船
鶯の結語五音に納めたる
掌に零す薄荷油蘊ぐもり
岩盤に残る化石や花こぶし
初夏の珊瑚の海やぬちぐすひ

霞袂集
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
矢削みき子

高きより棟梁の指示風光る
遣り水の七曲りして花筏
舟屋より出て春光へ舳先向け
散髪の後の鼻歌春の虹
京大のロゴの樟若葉せり

氷凌集
余米 重則
松本 節子
柴田 靖子
大口 彰子
重富 國宏

2019年6月

氷積の章

尾池和夫選

雛の夜の二段ベッドの上と下
一礼に去る大仏の春の闇
春陰や鳥の眼をして風を読む
淀川の始まる辺り野火烟る
白魚に大きすぎると言ふ理由

霞袂集
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
矢削みき子

金メダルかけて呉るる子つばくらめ
磯漁の魚分け合ふ浜うらら

氷凌集
大口 彰子
原 稔

水郷と呼ぶる在の下がり雛
別件は遊びの誘ひ水温む
鷹化して鳩となり児に追はれけり
大原の霞へ帰る野菜売

重富 國宏
余米 重則
佐藤美智子
柴田 靖子

2019年5月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

さにつらふ色に芽の出る雨水かな
春遅しバスの手摺の静電気
石垣の石の隙間に春兆す
灯明のひとすぢに春立ちにけり
土のにほひ水のにほひや木の根明く

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
矢削みき子

氷凌集

薄氷や光溶けゆく水の中
鬼は内むかし九鬼氏の城下町
麦踏むや筆のはげしきゴッホの絵
耳長き犬の飛び付くしやぼん玉
杉玉の軒に吹き溜め玉霰

吉田 恭子
重富 國宏
余米 重則
大口 彰子
松本 節子

2019年4月号

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

賀状読む一枚づつを声にして
待春や横向けといふ似顔絵師
鸞替の渦や気づけば外へ外へ
風花をいひ平城山をふりかへる
みづうみの波かさねあふ春隣

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
三和 幸一

氷凌集

昆虫の標本並ぶ寒さかな
花びらのガラスと化しぬ寒の薔薇
荒々と馬が土搔く鳥総松
箸紙に恙なき名を十いくつ
海苔箸の有明海を埋めてをり

大口 彰子
余米 重則
吉田 恭子
柴田 靖子
重富 國宏

2019年3月号

氷積の章

尾池和夫選

太白星の寒さ類族改め帳
枯蓮のもう触れ合ふといふをせず
十一面のひとつが後ろ冬深し
年惜しむ杉の古木に手を当てて
糠床と労ひ合うて小晦日

霞袂集

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
矢削みき子

氷凌集

珈琲にはこのチョコレート冬日向
湯豆腐やひと雨きたる苔の庭
抜き足の次は差し足池普請
靴下に溢るる駄菓子クリスマス
相輪の空突く高さ山眠る

余米 重則
松本 節子
重富 國宏
大口 彰子
吉田 恭子

2019年2月号

氷積の章

尾池和夫選

音読の宇治十帖や菊日和
下京へ時雨の雲の至りけり
伐採のあとの明るし冬の鴉
短日や幾度も峰を振返り
いつの世の鏝跡とや日向ぼこ

霞袂集

友永美代子
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
矢削みき子

氷凌集

小春日や吠ゆる仔犬の名はサスケ
寒昂指もて示すあの辺り
寒鰯や力士のやうに塩を振る
垣根なき隣と落葉焚きにけり
初冬の波遊びたる島嶼かな

余米 重則
重富 國宏
大口 彰子
原 稔
屋嘉比順子

2019年1月号

氷積の章

尾池和夫選

話また久女に戻る菊枕

霞袂集

有岡 巧生

白露や灯のつつましき屋敷町
龍淵に潜み青空堕ちてきし
火の山の微かな煙蕎麦を刈る
みづうみと言ふ月光の器かな

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一

ベネチアの仮面の笑ふ夜寒かな
鹿垣をつくろふ村の役となり
奥嵯峨の竹伐る音の響きあふ
秋日受け岩の錆びなる黄金色
半眼の麒麟の咀嚼天高し

氷凌集
余米 重則
原 稔
松本 節子
重富 國宏
大口 彰子